

巡る人々—大巡りの習俗を通して—

吉留 徹

I. はじめに

山口県内には、山代四国八十八ヶ所霊場（岩国市：旧美川町、美和町、本郷町、和木町、岩国市）周東祖生観音八十八ヶ所、三十三ヶ所観音霊場（以上周南市：旧周東町）、周防大島新四国八十八ヶ所霊場（周防大島町）、秋穂新四国八十八ヶ所（山口市：旧秋穂町、山口市）、宇部白松新四国八十八ヶ所霊場、岐波組西国三十三観音（宇部市）、御嶽八十八ヶ所（狗瑠孫八十八箇所霊場）（下関市：旧豊浦町）、桑山八十八ヶ所（防府市）等ほぼ全域に亘って霊場が存在しており、いわば、本四国の八十八箇所や機内の三十三箇所など大師信仰や観音信仰に影響を受けた地方霊場というべきものが認められる。豊北地域にあっては、大正期頃までは、北浦八十八ヶ所新四国霊場がおこなわれており、現在では阿川浦地域にオダイシ講の祭りのなかで、当時の霊場札所を示す幟や札所にあった石像のオダイシサマが用いられ、八十八ヶ所霊場そのものはなくなったものの、現在でも地域の人々に広く信仰されている。

本稿では、これらの八十八ヶ所霊場およびオダイシ信仰に関する予備的考察として、周辺地域の八十八ヶ所霊場がどのようにおこなわれていたのか、今回玄海灘地域において広くおこなわれる地方霊場のうち、佐賀県地域の事例を基に検討したいと考える。

佐賀県東松浦郡北部地域には四国八十八ヶ所霊場から御霊砂を分霊して路傍などに御堂等を建て、観音、地藏、薬師如来、弘法大師像など様々な諸仏を祭祀した札所と呼ばれる所が多く存在する。そしてこれら諸仏や弘法大師信者の家など、時を定めて、先達（センダツ）とよばれる者を先頭に信仰者が集団で巡拝する大巡り（オオメグリ）とよばれる習俗がある。昔は肥前国北部霊場大巡りとして百年前に開基されたといわれるが、その起源については明確でない。しかしながら、唐津市内を中心とする「大聖院大巡り」、「唐津弘山坊大巡り」、「草野霊場大巡り」、「鏡大巡り」、鎮西町・呼子町を中心とする「松浦金剛大巡り」、玄海町を中心とする「松浦四国遍照大巡り」、肥前町を中心とする「星賀大巡り」など様々な巡礼団が組織されて、期日を各々決めて行われている。ここでは、平成7（1995）年に玄海町においておこなわれていた「松浦遍照四国大巡り」の実態を取り上げ、同じ玄海町内でおこなわれる肥前町を中心とする「星賀大巡り」と比較しながら、特に巡礼をおこなう人々に焦点をあてて考えてみたい。¹⁾

II. 松浦遍照四国大巡り

II-1 文献資料のなかの大巡り

まずは、文献に記載されている松浦遍照四国に関する由来等、その開基に関するものについて検討してみたい。由来に関する文献としては、『松浦遍照四国由来記』[年代不詳だが、大正4（1915）年以降の記述と思われる。大良 堀田彦根<後の切木村長>謹書、以降『由来記』と記す。]、『佐賀県東松浦郡松浦遍照四国案内記』[大正13（1924）年発行 浅野伊勢吉著、以降『案内記』と記す。]と『松

浦遍照四国沿革史』〔昭和 35（1960）年 9 月編纂・平成 4（1992）年 3 月複製、文責 清水義見、以降『沿革史』と記す。〕の三つがある。

『由来記』によれば、梨川内の園田利七は信仰篤い求法修行に三回四国霊場を遙拝し、四国霊場開基千百年にあたる大正 3 年（1914）に御尊影を勧請、さらに同年再度四国に行き、六十一番札所香園寺瑞円阿闍梨の弟子となり、得度して秀全と号し、有浦、切木、値賀、名古屋（原文まま）、打上の五ヶ村に亘り八十八ヶ所に御尊影を安置し、それに加え岡本倉平（田代）、松本吉兵衛（大良）が四国霊場から請けてきた御霊砂を埋納し、以て松浦遍照四国と称し、大正 4 年 3 月に開基したとされる。その時の世話人は値賀川内、田代、名護屋、大良の代表 4 人の外に 119 名と記載されている。『案内記』でも本四国の開山千百年にあたる大正 3 年に園田秀全氏（利七）が本四国からの御分霊を願い、御霊地御本尊御堂下の土砂を岡本倉平、松本吉兵衛の両氏が当地に受け、大正 4 年開山したとはほぼ同様な記述が認められる。

『沿革史』では、『由来記』『案内記』と異なり、成立以前の記述がみえ、松浦遍照四国は、前身として名護屋巡りと称していたものがあり、それを改組拡張して成立したものであるといわれる。名護屋巡りは明治 32（1899）年 3 月肥前名護屋の篤信家によって開始され、玄海町にも札所や信者が増加してきたと伝えるが、その経緯についてははっきりしない。その後『由来記』『案内記』の記述と同様に大正 3 年園田利七（秀全）が四国に行くが、これに青木常治（白畑）、古館円吾（値賀川内）同行のもと御分霊を拝受するとの記述が新しく加わる。また時を同じく岡本倉平（田代）、松本吉エ（大良）が四国八十八ヶ所御本尊堂下の土砂分譲を願い、有浦村、値賀村、名護屋村一円、打上村の内石室及び横竹、切木村北部一帯に御分霊、土砂を共に勧請安置したとあり、場所の設定も細かく伝える。さらに、これ以降の歴史について『由来記』『案内記』より詳細に記述される。大正 4 年 3 月四国六十一番札所香園寺山主山岡瑞円師を導師に迎え、松浦遍照四国の開山式を行う。そして昭和 8（1933）年 12 月 8 日、遍照四国中央部の有浦に本堂御堂を建設する。昭和 14（1939）年宗教団体法により四国の秋月瑞憲師の進言に従い、北波多村大杉正福寺住職宮本善範師（真言宗御室派）に手続きをお願いし、合法的に発足、現在護国山遍照寺（真言宗醍醐派）となったとある。

開山までの歴史については、どの文献資料もだいたい同様なことを伝え、梨川内（旧切木村現唐津市）の園田利七（得度して秀全という号をもつ）という篤信家による弘法大師の御尊影・御分霊の勧請と岡本<田代（旧切木村大良の一部現玄海町）>・松本<大良（旧切木村現唐津市）>両氏の本四国霊場の御霊砂を持ってきたことにはじまるというもので、これらの文献資料から現在の松浦遍照四国が成立したのは、旧切木村を中心にした篤信家によって大正 4 年頃に始まったものであったと考えられる。また何故、この地に八十八ヶ所霊場が開かれたということに関しては、いずれも、松浦の地が延暦 23（804）年 5 月 3 日弘法大師 31 才のときに肥前松浦潟より御船により唐へ向かっていったという伝承に基づいていると説いている。

II-2. 大巡りの伝承組織

現在も松浦遍照金剛は有浦・値賀・名護屋・打上・唐津の一部（大良・田代）旧五か町村で構成されている。本部は、旧有浦地区の諸浦遍照寺にある（平成 7 年調査時）。通常は堂守である方が一人で管理されている。松浦遍照金剛への入会については別段特別なことはない。地区の世話人に「今度

の春巡りから参加したい。」といことを頼むばかりである。松浦遍照金剛の役職としては平成4年には住職に北波多村徳須恵正福寺住職兼務、住職代理（堂守）1名、そして総代とよばれる役員がいる。総代は旧五か町村の旧打上地区（石室）、旧有浦地区（有浦上）、旧切木北部地区（後川内）、旧値賀地区（浜野浦）、旧名護屋地区（串）に各1名の計5名がおり、そのうち1名が総代長になる。その他会計2名（大会計と小会計）、監査2名がいる。総代は本番札所を所有している人や信仰心のある人を選ぶ。役員任期は別段なく、改選は役員総会であるシンボクカイ（親睦会）で行う。しかし実際は、親睦会が行われる前に次の総代になる人を推薦して承認を得る形式をとっている。親睦会には各地区ごとの世話役に案内を出すものの、ほとんど出席はない。親睦会は、年2回、3月と10月1日に諸浦の遍照寺で行われる。この時に、住職より春秋の大巡りの順路と日割表の案が出され、親睦会で実施期間、最初の場所が決定される。

親睦会には、総代の他に各旧地区内の各地区・迫（組内）単位に世話人が出て、総会での決定を各迫に連絡する。世話人の決め方は各地区で異なる。例えば旧値賀地区の浜野浦地区では、昔は世話人は信仰篤い人がなっており、任期などなかったが、その後地区の上・下各迫から二人ずつ出すようになり、現在では4戸ごと、弘法大師信仰者の各家を輪番で廻り、二年交代で行うようになったという。また旧有浦地区の長倉地区では番札所を持っている人、奥の院、観音様を祀っている人が任にあたっているという。

Ⅱ-3 大巡りの方法

巡る日程は春秋の彼岸および夏の土用近くに決めている。昔は1週間かけて歩いて巡っていたが、その後ヨウカメグリ（8日間）、ココノカメグリ（9日間）になり、現在では3日行って1日休み、9日間で巡る形式が取られている。春が3月15日前後から始まり25日までで、秋が10月中旬から、夏は土用前後に行う。

春秋の彼岸には各地区にある本番八十八ヶ所の札所（札所の位置については、『玄海町史 下巻』を参照）、番外札所、本番札所では、札所とよばれる個人の家を巡る。本番札所では地区の管理する札所と個人の管理する札所がある。本番札所以外の個人の札所は、世話人を長年務め、信仰心篤い所が札所になったのではないかとされる。その他に札所以外の弘法大師信仰者各の家を巡る。巡るのは、信仰者のうち希望者の家だけで、大巡りのある前年に亡くなった人がある家や49日忌、13回忌、35回忌などの年忌法要がある家など、先祖供養をおこなうところは、特に参ってもらう。これに対し、夏の大巡りは本番のみを役員が中心になって巡る。

廻る順路は、固定的なものでなく流動的であるため、歴史的な札所の変遷は明確ではないが、打ち止めの場所は決まっている。平成3（1991）年度の大巡りの順路は表-1のとおりになっており、一番札所（長倉）から順番に沿って巡るということにはなっていないようである。また札所自体の位置も、開基当初とされる『案内記』に記載されている八十八ヶ所の当時の札所と本尊は、表-2のようになっており（原文まま）、現在の場所といくつか移動が認められる。色々な不幸ごとがあり、オタイシヤマ（弘法大師）を信仰してはどうかと、信仰している人から勧められ、他所から移転したという話も聞かれる。

表－1 【松浦遍照金剛大巡りの日程】 平成三年春巡り（3月19日～26日）

19日	小加倉→白畑→力石→有浦上村→有浦下村→長倉
20日	藤平→八尋→永田→大良→中尾→後川内→梨川内
21日	小十→大鳥→田代（唐津市）→田代→轟木→諸浦→新田→石田
22日	仮屋→大藪→浜野浦→平尾
23日	仮立→普恩寺→下宮→外津→中通
24日	値賀川内→串→大久保→先部→淀野→波戸
25日	先部→麦原→畑中→池之端→茜屋町→名護屋→浜→北区・南区
26日	横竹→赤松→野元→石室（打ち止め）

夏巡り夏の土用巡りは札所（本番のみ）

第1日	外津→下宮→普恩寺→平尾→浜野浦→石田→仮屋→新田→諸浦→轟木泊
第2日	田代→田代（唐津市）→大鳥→小十→梨川内→後川内→中尾→大良→永田→八尋→藤平→長倉→有浦下村→有浦上村泊
第3日	白畑→小加倉→石室→野元→横竹→名護屋→北区泊
第4日	茜屋町→池之端→畑中→麦原→先部→波戸→串→値賀川内→仮立→中通（打ち止め）

II-4 札所・各家での巡拝

①参加者と装束 参加者の多くは、オダイシ（弘法大師）を信仰している各地区のハツカ講のコウシャナカマ（講社仲間）である。しかし、コウシャナカマでなくても宗派、性別、年齢等の制約はなく、誰でも自由に参加できる。またコウシャナカマでも必ず参加しなければいけないという制約はない。そのため地区ごとに巡拝する人数は様々で、多いところでは60人位になるところもあり、昔は100人を数えたという。参加者は女性の方が多い。

大巡り当日には、行く前に風呂に入り、身体を清め、家に祭祀する大師像、掛軸などを拝んで行くという。大巡りの出欠はだいたい昼くらいにとる。出欠は札打ちに使用する納め札を使用し、会計がこれを集める。先達を先頭に、旗持ち、会計、その後に巡拝者が連なって歩く。行列の順番は関係ないが、先達や旗持ちより先に行ってはいけないといい、旗持ちと先達である僧職が先頭に来るように歩く。先達は以前は佐賀県北波多村の真言宗醍醐派正福寺の僧職が行っていたが、病気のため唐津市和多田の真言宗御室派鶴林寺の僧職が行うようになった。基本的には先達ができる限り継続するという。

旗持ちは、ハタモチサン、センダチモチといい、「松浦遍照四国」と記名され、弘法大師像を縫いこんだ緋色の旗（センダチバタ）を持って巡る、各地区、各迫の世話人で、先達に迫のどの家を廻っていくのか、教える役目である。現在は、世話人が旗を持つが、昔は寺院本部から選ばれた人で、全期間休まず参加するような信仰心が篤い、得度を受けた専門の人が持っていたという。本来なら男性役であるが、現在では女性になる場合が多く、年齢順か迫の家廻り順で決めていた。旗は雨等の場合は濡れないようにビニルできちんと保護され、次の迫、地区の旗持ちに受け渡すまで大事に扱われている。

巡る時には、昔は頭にヘンドガサ、手に手甲、足に脚絆、草鞋を履き、笈摺（オイヅル）を着、手には数珠を持ち、頭陀袋（サンヤブクロ）を肩からかけ、納め札、金剛杖をもって巡っていたという。

今では各々の服装は自由になり、軽装化して歩くのに適した運動着、運動靴で、頭には普通の白帽子に布をかぶせた格好で巡る人が多い。ただ納め札・金剛杖・数珠・サンヤブクロは、現在でも持って廻る。

ヘンドガサは、丸型の深い菅笠で、イラクサ（皮膚病）が出来たときにヘンドガサで「ソモソモコノクサトモウセシハ ホンハッセンヤツノクサ アブラオンケンソワカ」と唱えながらあおいでやると治るといふ。笠は得度を受けた人だけが被ることができ、そのために、佐賀県北波多村の真言宗醍醐派正福寺に得度を受けに行くといふ。

笈摺は、白布地の袖無しの着物で、背中に「八十八カ所同行二人」「南無遍照金剛」と書かれている。現在でも新四国八十八ヶ所霊場がある福岡県糟屋郡篠栗町の札所などで購入したりするといふ。亡くなったときの死装束にこれを使うといふ話も聞かれる。

金剛杖はコンゴサンといい、歩くときの杖にする木の棒で、先端に、「同行二人」と書き、大師と二人で廻っているという意味があるといふ。実際長い道のりを歩くわけだが、杖をつけて歩くと疲れないといふ。通常は人が踏まない床の間などに置いておかれ、大巡りが終わると洗って再び床の間に置く。橋の下には大師様が寝ているので、橋を渡るときには杖をついたらいけないといふ。女が跨ぐと尻が腫れるなどともいわれる。また急に人が死んだりした場合は死体が硬直するが、杖で撫でると体が柔らかくなるといふ。

納め札は、紙に住所、氏名、年齢を書き、参拝場所に納めてくる。日付まで書くのが本当であるといふが、書かない場合も多い。昔は家で準備をしていたが、最近は福岡県篠栗町の札所から買ってくるといふ。納め札はカマスに取って置いて天井に吊していたら火事にならないといふ。

頭陀袋（サンヤブクロ）は、お札打ち用のお札を入れる、布製、ビニル製などの提げ袋で、「同行二人」と書かれたものもある。これも多くは篠栗町の札所で購入したものだといふ。

②札所のしつらえ 巡拝する札所は本番と番外（奥の院）があり、各個人宅の一区画に小さな堂を建立し併設されているものと、地区の路傍の一区画に御堂が建立されている場合がある。個人宅の一区画に本番札所がある場合は、家人で供え物を準備し、地区にある札所では各迫ごとのコウシャナカマにより、接待用の豆御飯あるいは混ぜ御飯、吸物、煮染めなどが準備され、本尊と弘法大師に供え、お菓子や生花などを飾り簡単に供えている。一方信仰者のうち巡拝者の訪れる各家では臨時の祭壇を縁側や床の間などに作って迎える。祭壇は、各家思い思いの飾りでバラエティに富み、家独自の特徴を示すものと思われる。基本的には、縁側に三段あるいは二段の棚を据え、その後ろに屏風を立てる。棚には色鮮やかな布や仏壇に使う金色の打敷を敷く。棚の上段には30cm程の家の位牌、10cm前後の弘法大師の木製座像、子安弘法大師立像、その他、家の守り本尊といわれる観音、不動明王などの仏像を置く。中段には供物として、バナナ、林檎などの果物、菓子を高杯に入れて供え、豆御飯あるいは混ぜ御飯、吸物、煮染めなどを椀、皿に供え、両側には生花を差した花立を二組飾る。下段には線香立て（香炉）、燭台、水かお茶を供える。棚後ろの屏風には普通の屏風をはじめ、弘法大師の御影面、十三仏の掛け絵図、不動明王立像など弘法大師のみならず、自分の信心する仏図などを掛け、家の内部が見えないようになっている。昔は林檎箱のような木箱の上に布をのせて、後ろに屏風などを置いていたものであったといふ。

③巡拝の方法 札所に着くと、まず最初に祭壇に巡拝者が納め札を順に供え、先達である僧職が灯明を灯し、線香を焚く。先達の後に続き、全員で般若心経を読経し、札所に祭祀してある本尊以下の諸仏に対して各々の御真言を唱え、最後に弘法大師の御宝号（ナムタイシヘンジョウコンゴウ 南無大師遍照金剛）、回向文（ネワカバ コクトクモツテ アマネイッサイニオホシ ワラトシキョウト ミトモブツトウジヨウベ コトオ 願わくばこの功德を以てあまねく一切に及ぼし 我らと衆生と皆共に仏道を成ぜんことを）を読経し次に移動する。

各家ではカドに「奉納 四国八十八カ所」という書かれた長方形の白布あるいは何も書かれていない四角形の白布が掛けられ、巡拝者が廻る家であるという合図になっている。巡拝者は縁側あるいは床の間に用意された大巡り用の臨時の棚の前に並ぶ。床の間にオタイシ様が祭祀されている場合は玄関の所より行う。家の者より地区の先達がお布施（トウミョウセン 灯明銭）を貰い受け、それから先達である僧職が棚に置かれた蠟燭に灯明を灯し、線香を焚く。家によってはすでに灯明や線香を焚いている所もある。最初に僧職が鉦をならし、般若心経を唱える。その間、巡拝者が右回りに順に納め札を棚の前に置かれた盆などに納める。棚の最前列に先達である僧職、左に得度を受けた者、右に地区の先達である旗持ちの順に並び、その後ろに巡礼者が並ぶ。札所と同様に、各家で祭祀している子安弘法、観音、地藏等諸仏の御真言を先達の後に全員で唱え、先祖供養のために阿弥陀如来の御真言を唱える。その年亡くなった家ではさらに観音経を読経、僧職単独で家内安全、五穀豊穰、交通安全なども祈祷する。最後に、僧職の先導で全員で弘法大師の御宝号を合唱し、回向文を読経する。そして皆次に移動する。

迫から迫、あるいは地区から地区へ移動する場合には旗の受け渡しが行われる。昔はホラ貝を先達が吹きながら、次の地区へ廻る合図を行っていたという。旗の受け渡しについては別段名称はなく、お疲れさまでした、よろしくお願ひしますという挨拶を交わし、旗を手渡すのみである。同性、異性への受け渡しの際にも同様に行われる。

戦前までは大巡りの参加者はその日の打ち止めのところを宿泊地としており、これをヤドといていた。昔は大巡りをする人を家に泊めると縁起がいいといて宿泊させていた。ヤドは役員が決め、コウシャナカマの家を割り当てて6名位で分散し宿泊していたという。ヤドにあたる家には、御札に大巡りの接待でいただいた品々を置いていたり、お金を集めて渡したりしていたという。戦後は車での移動が行われるようになり役員だけを宿泊させるようになったが、5、6年前からはヤドになるところはなくなり、一日の大巡りの行程が終わると一旦家に帰り、翌日打ち始めとなる場所に集合して始めるようになった。

④オセツタイの方法 巡拝者に対し、地区、迫あるいは各家ではオセツタイ（接待）が行われる。前者の場合、集団で行う接待には部落接待（ブラクセツタイ）と迫接待（サコセツタイ）の二通りがある。

浜野浦では地区のコウシャナカマによる部落接待が行われ、大巡りの座があり、女の人が廻り座で係りを決め、各家より米・野菜などを持ち寄り、座元の家で接待をしていた。接待の費用はワリカン（割り勘）で行う。それ以前は、本番札所のある家や世話人の家で行われていたという。現在では接待場所が個人の家から公民館になった。昔は100人近くの大巡りがあったので、椀や皿が足りなくなるほどであったという。

迫接待では各迫ごとに集まって巡拝者に接待をしており、各戸から米、野菜などを出しあって、迫内の一軒の家が家廻りでザマエ（座元）になって、ザマエの家で料理を作りお接待していたという。長倉地区では迫接待を行い、5つの迫のうち1つの迫が接待当番であるオセツタイタキにあたる。オセツタイタキの順番は迫回りの輪番で、荻野迫→向上→一の坪→平潟下→平潟上→荻野迫の順に回り、最後に地区の当番の迫を巡拝者が巡るようにしていたという。迫接待の場合は弘法大師の信者の人でなくても、迫内が全員参加してお接待をしていた。

現在公民館を接待場所として利用している地区でも数年前位まではコウシャナカマの家、タイシ講の家を春秋輪番で接待場所として行っていたという。その時はマヤ（納屋）を利用していた。接待の品は昔はオスワリ（餅）をついて、仏事の精進に作るマメンメシ（豆飯）と混ぜ御飯のおにぎりを用意し、各一個を巡拝者に持たせていたが、その後大福や饅頭などを接待に出すようになり、現在は素麺、揚げ豆腐、ほうれん草のお浸し、大根と人参のなます、山菜おにぎり、飴湯など種々の料理が大皿に用意して出されるようになり、次第に盛大になったという。接待の料理の前で全員座り、僧職が般若心経を唱え、全員で合唱してから食事をする。現在、これらの料理は地区や迫単位のコウシャナカマによって公民館において作られる。接待もコウシャナカマによって行われるが、接待の人は巡礼の人と同席することはなく、食べ物の運び役、接待役に廻る。

各家の接待の場合には、家のホカやマヤに台を出し、以前は餅をついて団子にしたものや春に蜜柑、秋には柿などの季節の果物、その他にハンニヤトウ（酒）、肴、素麺などを用意し、巡拝者すべてに御接待に出し、残った者は子供が食べていた。しかし家で接待をすると時間もかかり、用意するのが大変だったという。最近ではマッチ、軍手、袋菓子、ジュース（オロナミンC）等実用的なものから嗜好品など種類も多数になった。

大巡りの一番最後の打ち上げの日をシマイイワイといい、くじ引きがあり大師像の掛軸などが当たっていた。シマイイワイの場所は決まっており、春巡りは石室（総代長）の本番札所、夏の土用巡りは仮立・中通の公民館で一年交代で行う。秋巡りは浜野浦で上下迫で分かれて1年交代で行う。以前は平尾と交代で行っていたが、コウシャナカマが減ったので浜野浦だけで行うようになった。1日参加した者にはタオル1本、3日参加した者には白帽子、5日参加した巡拝者にはサラシ1枚を松浦四国遍照から記念品として渡される。

大巡りの運営は、終了後に各地区の会計より、灯明銭が大会計に集められ、先達である僧職の報酬、シマイイワイの経費にあてられ、残りが松浦遍照金剛の運営資金にあてられる。そしてこれより札所の修理、信者の葬式の香典などにあてられる。

Ⅲ. 星賀大巡り

星賀大巡りは肥前町を中心に玄海町では牟形、仁田野尾、湯野尾、座川内地区が入っており、牟形以外は旧切木村に属する。ただ牟形の漁業組合は玄海町の漁業組合ではなく肥前町の漁業組合に加盟しており、肥前町との関係が深い。星賀大巡りは春3月と秋10月四日間ごとに行われ（順路は表-3を参照）、3月は6～9日、10月は1日～4日に松浦遍照金剛に入っていない人が中心に巡拝する。星賀大巡りの打納めは、明治21（1888）年高野山成福院（唐津藩菩提寺）より勧められ、開基され

たという明暗大巡り「大聖院大巡講社」から昭和30年頃に分離したといわれる西部大巡り（通称納所大巡り）と同じ打ち納め場所である法海寺にしており、昭和45(1970)年までは明暗大巡りと分かれていた。しかし昭和46(1971)年法海寺において合同世話人会があり、納所大巡りと合わせて世話人103名となった。なお、その時の星賀大巡りの世話人は29名で、玄海町では牟形2、仁田野尾1、湯野尾1、座川内3の計7名の世話人を選出している。

現在、星賀大巡りは唐津市大聖院（高野山真言宗）管轄によって住職を先達として行われるが、玄海町を巡る際には肥前町菖津大鶴の鶴の岩屋（法海寺）の堂守が先達となり、センダチバタをもって各家を廻る。法海寺は唐津市大聖院より得度を受けた者が管理しており、大巡りの打ち納め場所とされる。星賀大巡りには松浦遍照でみられるような第何番札所というのはなく、オダイシ（弘法大師）を祭祀している家が札所となり、各家を巡るばかりである。

大巡りの日程や順路は唐津市大聖院が鶴の岩屋（法海寺）で春秋に行う護摩祈祷の日程前に行うように法海寺が日程の設定を行い、玄海町の各地区の世話人に連絡する。順路は殆ど固定しているが、牟形から始まる場合と座川内から始まる場合がある。

現在地区の世話人の選出方法は各地区で異なっている。座川内地区では昔は地区に熱心な男性の信者がおり、何年も続けて世話を行っていたが、現在は男性の参加者が少なくなり、オダイシをもっている家が全員参加して、家の輪番により三名決めており、任期が二年交替で、一人やめて新しく一人入るという方法をとっている。世話人は地区へ大巡りの日程・順路の連絡のほか、巡拝者が廻る家を案内する。

巡拝方法は松浦遍照四国大巡りとほとんど同じような方法で行われ、巡拝者の一行は「佐賀県新四国霊場」と書かれた弘法大師の絵がある小豆色の旗を持ったセンダチを先頭に巡る。昔は頭にヘンドガサ、手に手甲、足に脚絆、草鞋を履き、笈摺（オイズル）を着て、手に数珠を持ち、肩からはサンヤブクロをかけ、納め札、金剛杖をもって廻っていたという。納め札、草鞋などは昔は自分の家で作って履いていたという。今でも各々の服装は自由になったが、やはり笈摺を着て歩く人も多く、納め札・金剛杖・数珠・サンヤブクロは現在でももって廻る。納め札には住所、名前、年齢を書いておく。今は「奉納四国巡拝同行二人」と印刷された紙を、大巡りの初日の日にセンダチリョウといい先達が百円で巡拝者に配布するが、以前は前日までに和紙に子供が名前、住所を書くばかりであった。札がない人は洗米をあげていた。あげた納め札は、各家で管理され仏壇の下などに置いておく。そして家人が亡くなったときに一緒に棺の中に入れるという。

各廻る家に着くと先達に合わせて般若心経、光明経などを一同で唱える。燈明錢をあげる家にはその他に不動妙王の真言を供える。またニイボトケ（新仏・・・その年に亡くなられた人）の家では観音経をあげる。読経が終わると納め札を各家にあげて次の家へ移動し、地区から地区へ移動する。方法は同じように行われるが、松浦遍照四国大巡りにみられるような旗の受け渡しはない。

巡拝者に対しては各地区でオセチアテという接待がおこなわれるが、座川内地区では上・中・下の三迫に分かれて巡拝者に各々接待を行う。上、下迫ではオダイシを祭祀する各家々で個人的に接待を行うが、中迫ではオダイシを祭祀していない人も参加して迫全体で接待を行う。迫での接待場所は迫の家が輪番で座元になり、そこに迫のものが米など接待材料をもちよって接待の準備をする。各家で

は縁側に臨時にオタイシ用の小さな低い棚を設ける。二段か三段程度のもので、後ろに屏風や弘法大師の掛図を置く。棚の上には弘法大師像・修業大師、家の位牌等を置き、季節の果物、生花、霊供膳など供物を置く。霊供膳は煮染め、汁物、向付け、酒、豆御飯の五品を供える。

巡る場所はオタイシを祭祀している家が札所となり、信者各家を巡るばかりである。ただ信者でなくてもザマエ（座元）の家は巡っていくという。そして巡る場所では迫ごとあるいは家ごとの接待が行われる。

座川内では、大巡りの時には昔は上口、中口、下口の各迫ごとが集まってお接待を行っていたが、現在では迫で接待を行っているのは中口迫だけで、その他は一軒、一軒各戸で行われるだけとなった。迫で行っている時はムラセツタイといい、弘法大師の信者の人でなくても、迫内が全員参加してお接待をしていた。各戸から8合づつの米、野菜などを出しあって当番の家で迫の人が全員で料理を作りお接待していたという。当番は迫内の一軒の家が家廻りで輪番でザマエ（座元）になっていた。

また松浦遍照四国と同じようにその日の最後の打ち止めのところを宿泊地としており、これをヤドといていた。昔は大巡りをする人を家に泊めると縁起がいいといて宿泊させていた。ヤドにあたる家はネマ（寝間）が広く、8～10畳ほどあり、ある話者の話では星賀の網元の家に泊まっていたという。巡拝者がヤドにする所は泊まり慣れた所で、座川内から星賀に行く場合は、星賀のドシ（友人）の所に泊まり、星賀の人が座川内に来る場合は座川内に泊まるという具合に交代で泊まっていた。だいたい2～3人が泊まっていたという。現在でもヤドとなる家では、1000円程度を各家より集めるといふ。

表－3 【星賀大巡りの日程および順路】

【春】

1日目	牟形→加部良→寺浦→立石→梅崎（ムカタゾロイといい梅崎で打ち止まり）
2日目	仁田野尾→湯野尾→座川内
3日目	岩野→菖津→鶴牧→晴気→犬頭
4日目	星賀

【秋】

1日目	星賀
2日目	晴気→犬頭→鶴牧→菖津→岩野→
3日目	梅崎→立石→寺浦→加部良→牟形
4日目	田野尾→湯野尾→座川内

IV. 予備的考察として

玄海町において繰り上げられる二つの大巡りは、豊北地域でもみられるような講を形成し、各家でオダイシ像を飾り、接待をおこなっている点では非常に似た形式を有している。これは、茨城・埼玉・千葉など関東地方一円や備前地方などで大師送りあるいは送り大師とよばれ、講を形成して、弘法大師の絵や像を木箱に入れ、持ち廻りながら霊場を巡拝するもの形式³⁾とは異なっている。ただ玄海町の大巡りには大師像をセンダチバタに縫い込んであり大師と一緒に大師の跡を歩くという、大師送りの

絵像等と同じ感覚であり、その意味では、大師送りの一形態であるといえよう。

松浦四国遍照大巡りは、玄海町内に本部をおいており、参加者のほとんどが古くから各地区あるいは迫単位で行われる二十日講（大師講）の Kou-Shana-Kama により構成され、大巡りの運営組織と密接に関わっている。それに対し星賀大巡りは唐津市の大聖院を中心に肥前町において行われているためか、玄海町においては、星賀大巡りがどのような組織で運営されているのか、明確にはほとんど認識されていない。巡拝場所についても松浦四国遍照大巡りは第八十八番までの札所があるのに対し、星賀大巡りは第何番札所という札所はなく、信仰者各家・路傍に祭祀されている石仏を巡るばかりである。

どちらの地区にも共通しているのは、先達や管理、組織運営に真言宗派の僧職が関与している点である。特に星賀大巡りでは唐津市の大聖院が菖津の鶴の岩屋において行う護摩祈祷をおこなう日程に合わせて大巡りの日程が決められたり、大巡りの際に護摩祈祷のお札が先達より配布されるなど、寺院行事と密接に結びついている点は指摘できよう。また特徴的な点として、巡拝者として他地区を巡拝する場合は、接待される巡拝者であり、自分の地区を廻るときは巡拝者でもあり同時に接待を行う側の人間という構造を有している。民間の接待を受けながら、個人あるいは集団で巡礼する四国八十八カ所霊場、地方霊場の巡礼者とは異なり、巡拝者側と接待者側の2つの側面を同時にもっていると考えられる。そこでこの点に着目し、この大巡りの習俗を考えてみたい。

巡拝者側からみると、巡拝の時期と巡拝場所は、松浦四国遍照大巡りでは春秋の彼岸近くに八十八カ所の本番札所、番外、奥の院、数多くの信仰者の家を巡るのに対し、夏は本番札所だけ巡る。一方星賀大巡りは八十八カ所の札所などはなく、弘法大師信仰者の各家を春秋に二回巡るのみである。両地区に共通しているのは、春秋の彼岸前後に各家を巡るという点である。春秋の彼岸は春の農事始めの予祝祭や収穫祭の時期であると同時に祖霊が祭祀される時期であるとされており、この習俗を考える上での重要な問題を提示している。巡拝者にとって大巡りがどのように認識されているのか、実際、大巡りに参加する動機について、参加者の話を整理してみると、

- (1) 「歩く」という行為そのものが、自己にとっての修行であり、功德であるため。
- (2) 大巡りは金剛杖をついて「同行二人」という形式をとり、絶えず大師と共にいて弘法大師の救済を得るため。
- (3) 札所、各信仰者の家を多数廻り、大師像や諸仏を詣り、般若心経、真言を唱えることによって功德を積み、同時に自己および家人の無病息災、病氣平癒などの個人的祈願成就のため。
- (4) 個人的祈願が成就したための「お礼詣り」のため。
- (5) 大師講の成員であるため。

の5つの型が考えられる。単独の場合もあるし、重複している場合もある。特に(2)、(3)の話が多く聞かれ、そこには集団的活動としてよりもむしろ個人的な信仰による現世利益に根ざした動機によるものと考えられる。

接待者側からみた場合、前述のように集団の場合と個人の場合の接待がある。集団接待の場合、弘法大師の信者でない人や大師講に参加しない人も含め、迫のほとんど全戸が参加し当番の家で接待行われていたという。かつては、弘法大師の信者でなくても迫のほとんど全戸が大師講に加入していた

といわれ、信仰的講と自治組織が一体化していた。大師講は毎月20日の晩に開かれる講で、二十日講といわれ、各戸から一人出て、迫ごとに家廻りで当番の座元の家に集まり、当番の座主が弘法大師の掛け絵図（御影図）を床の間に掛け、灯明、線香を焚き、般若心経、和讃などを参加者全員で合唱し、お茶を飲み、談笑して夜半過ぎまでオコモリをするものである（詳細は『玄海町史 下巻』参照）。この講のときに大巡りの日程や順路などの連絡を受けたり、接待をどうするか話し合いを行っていた。世代が変わり弘法大師の信仰者だけが大師講に参加するようになり、参加しない者も増加し、現在では家に弘法大師の小さな像を祭祀しているが大師講や大巡りに参加しない家も多く認められるようになったという。

ほとんどの地区では、このような大師講のコウシャナカマであると同時に迫を中心とし接待がおこなわれていたが、次第に各家個人で行うようになったという。現在でもコウシャナカマであるなしに関わりなく地区の行事として行っている地区もいくつかは存在しているが、接待が集団から個人へと次第に移行しているといえよう。実際大師講がほとんど行われなくなった地区では、集団接待を行う場所もさることながら、大巡りに参加して準備を行う人が少なくなり、巡拝者に来てもらうことを希望する各家ごとの接待として変化していったのも必然的なものと考えられる。すなわち地域組織であった迫であり、迫の人々の紐帯としての信仰集団である大師講がなくなり、個人的な信仰者による大巡りの組織だけが存在するような形になったと考えられる。

一方、個人接待は各家ごとで巡拝者を迎える際にみられる。各家での巡拝者の迎え方の特徴としては、巡拝者を迎える際に縁側や床の間に臨時の棚が作られる点である。松浦四国遍照大巡りでは、二段、三段の棚が作られるのに対し、星賀大巡りでは、低い棚が作られる。多くの家の共通点としては弘法大師の像や絵などが飾られるが、これと家の位牌と一緒に供えられる点があげられる。その理由についてはオダイシサマと一緒に位牌をださないとアクビサスといって、サワルような感じがすると説明される。弘法大師と位牌の位置関係について、上段に弘法大師関係と位牌を同列に飾る家が多く、上段に弘法大師関係、中段に位牌というように、位牌（先祖）より弘法大師をより高次の存在としている家が若干認められる。

次に供物については、松浦四国遍照大巡りの方では多くの家で豆御飯か混ぜ御飯のどちらかが二組置かれる。家によっては下段にあげる家もあるが、一つは弘法大師へ、一つは家の先祖へ供えるためだといわれる。星賀大巡りでは一組だけ供えられる。供え方についても、松浦四国遍照大巡りでは単に皿や椀などに盛って供える家と五品（赤飯、豆ご飯、吸物・漬け物・厚揚げ豆腐・ヒジキ、野菜の煮物・素麺など）を霊供膳というお膳にして、二組あげるところがある。お膳にしてあげるところは下段に置く場合が多い。星賀大巡りでも霊供膳を一組あげる。このように迎え方には二つの大巡りには若干の違いがあるが、一見すると臨時にしつらえた仏壇である感じを受ける。星賀大巡りに比較すると、松浦四国遍照大巡りには、その傾向がより強いようである。松浦遍照には位牌だけを供えるところも筆者が観察調査した中で1例だけ認められ、その位牌は前年に亡くなられた人のものであった。

このような臨時の棚が置かれる空間に留意してみると、どちらの大巡りもほとんどの家では床の間より縁側に置く場合が多い。棚がそなえられる縁側は日常ではほとんど利用される場所ではなく、「エンから入るモノのは出るモノ」といわれ盆のホトケがああ世から帰ってきて出ていくとされる空間あ

るいは死者を送りだす場所とされ、死の空間と密接に結びついたものであるといえる。

本四国霊場の接待の動機について、前田は（１）遍路に対する同情心（２）弘法大師への供養（３）死者の菩提を弔うため（４）遍路が自分の身代わりに巡拝するものとしての四分類⁴⁾をしている。真野もこれを引用し、小豆島八十八カ所の事例⁵⁾を出し、そこでは「おへんど」が多い時期になると、新ぼとけを供養する個人の家や数軒の家が組んで米銭を出し合って接待する。しかも当日接待する家では仏壇の先祖の位牌を持ち寄って「おへんどさん」に拜んでもらっていたということである。前述の玄海町での大巡りに参加する巡拝者の動機には、（１）や（４）が認められるものの、（２）や（３）の意識がないようであるが、接待者としての儀礼をおこなう様々な形式のなかには（２）や（３）の認識が認められよう。特に（３）の死者、特に先祖の供養をしてもらおうとする形は、縁側という死と密接に関わる空間やそこで読経等を行う巡拝者の様々な儀礼をみても明らかのように、また地方霊場である小豆島八十八カ所の事例と同様なことが行われていることに気付く。大巡りの巡拝者は本四国においてみられる遍路のように俗界を捨て修行者として自己の滅罪、治病のために、人神や聖による遊行を儀礼的に模倣するものとしてだけでなく、接待者側からみれば先祖供養を行う来訪者であるといえる。昔の巡拝者が白の死装束をつけて巡るのも、単に人神や聖による遊行を儀礼的に模倣するものではなく、死者そのものが歩く姿ではなかったろうか、そこには季節ごとに遊行する精霊や祖霊たちそのものを具現化、視覚化したものとも考えることも可能であろう。

このように考えるならば、大巡りが巡拝者にとっては弘法大師信仰者の個人的信仰であり、現世利益に根ざした動機によるものと考えられるが、大巡りの時期や接待などをみてもわかるように古くから行われている地域の大師講と結びつき、同時に彼岸前後に行われる先祖供養を取り込み、各家も含めて定着していったものと考えられるのではないだろうか。しかし大師講や大巡りに参加していた人の世代交代の時期を迎え、従来に比して参加者も減少する傾向にあり、大巡りの形式も変化を余儀なくされる。

最後に、本稿が平成7年調査の資料に基づくものであり、平成20(2008)年の現在には、また大きな変化、変容が認められよう。豊北地域におこなわれているオダイシ信仰の変化とともに、北部九州、山口、四国といった周辺地域の変化の比較調査そのものが、必要となってくるであろう。

参考および引用文献

註)

- 1) ここでいう現在は、平成7年当時のものであることをお断りしたい。そのため、合併等で町名等が変更したものがあるが、当時の町村名であることもご容赦いただきたい。
- 2) 徳川時代の大檀主には肥前唐津城主寺沢家や、長門清末城主毛利家、長門豊浦城主毛利家、などと深いつながりがあったと伝えられる。
- 3) 松崎憲三『巡りのフォークローア―遊行仏の研究』(1985)・真野俊和『日本遊行宗教論』(1991)などにおいて詳細な分析が行われている。
- 4) 前田 卓『巡礼の社会学』(1971)
- 5) 真野俊和『旅のなかの宗教―巡礼の民俗誌一』(1980)

表-2 札所一覧『佐賀県東松浦郡松浦遍照四国案内記』（大正13年発行浅野伊勢吉著）〈原文まま〉

札所番号	本尊	場所	現在との異動（玄海町内）
1	志やか如来	宇登山（長倉）	
2	阿みだ如来	古城山（長倉）	
3	釈迦如来	不二ノ山（藤平）	
4	大日如来	八甲山（八尋）	
5	地藏ぼさつ	永山（永田）	
6	やくし如来	大谷山（大良）	
7	阿みだ如来	六峯山（大良）	
8	千手かんのん	熊峯山（大良）	
9	釈迦如来	木山（後河内）	
10	千手かんのん	神山（後川内）	
11	やくし如来	横國山（後川内）	
12	古くうぞうぼさつ	高尾山（後川内）	普恩寺
13	十一めん観世	笠松山（梨河内）	
14	みろくぼさつ	堂峯（梨河内）	
15	やくし如来	小田峯（梨河内）	
16	千手かんのん	佐志原（梨河内）	
17	やくし如来	大久保山（梨河内）	
18	やくし如来	堂谷山（梨河内）	
19	地藏ぼさつ	立春山（梨河内）	
20	地藏ぼさつ	経塚（梨河内）	
21	古くうぞうぼさつ	陳川山（田代）	
22	やくし如来	尾崎山（田代）	
23	やくし如来	日焼山（田代）	
24	古くうぞうぼさつ	廣山（轟木）	
25	ちぞうぼさつ	柳山（轟木）	
26	やくし如来	板地山（轟木）	
27	十一めん観世音	仙中山（諸浦）	
28	大日如来	南山（諸浦）	
29	千手くわんおん	石木山（諸浦）	
30	阿みだ如来	濱尾山（諸浦）	
31	もんじゅぼさつ	松尾山（新田）	
32	十一めん観世音	清水山（石田）	
33	やくし如来	大久保山（石田）	
34	やくし如来	岩保山（石田）	
35	やくし如来	? 王山（仮屋）	
36	ふどう明王	獨鈷山（仮屋）	
37	阿みだ如来	藤井山（仮屋）	
38	千手くわんおん	足摺山（仮屋）	
39	やくし如来	延光山（大藪）	
40	やくし如来	大石山（大藪）	
41	十一めん観世音	堂山（濱之浦）	

42	大日如来	上之山 (濱之浦)	
43	千手くわんおん	大道山 (平尾)	
44	十一めん観世音	志玉山 (濱之浦)	
45	ふどう明王	城納山 (仮立)	
46	やくし如来	仮立山 (仮立)	
47	阿みだ如来	? 大山 (仮立)	
48	十一めん観世音	中通山 (中通)	
49	志やか如来	中堂山 (中通)	
50	やくし如来	? 山 (中通)	
51	やくし如来	丸小間山 (下宮)	
52	十一めん観世音	釘原山 (下宮)	
53	阿みだ如来	下宮山 (下宮)	
54	ふどう明王	不動山 (外津)	
55	大つうちしやうぶつ	光明山 (外津)	
56	地蔵ぼさつ	伊屋河山 (値賀川内)	
57	阿みだ如来	江古山 (値賀川内)	
58	千手くわんおん	立岩山 (値賀川内)	
59	やくし如来	辻宮山 (串)	
60	大日如来	堂峯山 (串)	
61	大日如来	梅談檀山 (波戸)	
62	十一めん観世音	一ノ宮 (波戸)	
63	びしやもんでん	蜜教山 (波戸)	
64	阿みだ如来	大師山 (名護屋)	
65	十一めん観世音	幽露山 (名護屋)	
66	千手くわんおん	巨? 山 (名護屋)	
67	やくし如来	小松尾山 (名護屋)	
68	阿みだ如来	琴弾山 (名護屋)	
69	観世音ぼさつ	名室山 (名護屋)	
70	ばとうくわんおん		
71	千手くわんおん	勝男山 (名護屋)	
72	大日如来	我? 師山 (横竹)	
73	志やか如来	神高山 (石室)	
74	やくし如来	川上山 (石室)	
75	やくし如来	玉生山 (石室)	
76	やくし如来	青光山 (石室)	
77	やくし如来	藤井山 (石室)	
78	阿みだ如来	室城山 (石室)	
79	十一めん観世音	重室山 (石室)	
80	千手くわんおん	青龍山 (石室)	
81	千手くわんおん	護郷山 (石室)	
82	千手くわんおん	小南山 (小加倉)	
83	観世音ぼさつ	倉出山 (小加倉)	
84	千手くわんおん	鬼塚山 (白畑)	
85	観世音ぼさつ	力岩山 (力石)	有浦上字大久保

86	十一めん観世音	高次山（上村）	有浦上字寺の上
87	観世音ぼさつ	常樂寺	
88	やくし如来 東光寺（下村） 本番の距離二十一里十丁二十六間	有浦下字前田	
奥の院 1	拾 面観世音・大麻神社	成瀧山（長倉）	
奥の院 3	不動明王	岩崎山（長倉）	
奥の院 5	五百羅漢	鬼面山（永田）	
奥の院 10	大日如来	中央山（中尾）	
奥の院 11	大日如来	大日山（大良）	
奥の院 13	蔵王権現	岩野山（梨川内）	
奥の院 19	十一面観世音・蔵王権現	平野山（梨川内）	
奥の院 12	蔵王権現	元城山（木場？）	
奥の院 18	弘法大師	廣神羅（小十）	
奥の院 20	十一面観世音・十二三社権現 不動明王 大師の四十二才の記危（厄）除け の為に作	熊野山 （見備〈見借？〉） 唐津町	
奥の院 28	薬如来	楠王山（諸浦）	薬師如来
奥の院 41	弘法大師	辻野山（平尾）	
奥の院 45	白王神社	古岩山（値賀川内）	
奥の院 42	大日如来	七杖山（値賀川内）	
奥の院 60	蔵王権現	神光山（串）	
奥の院 36	不動明王	普経山（名護屋）	
奥の院 64	蔵王権現	玄波山（波戸）	
奥の院外	正観世音菩薩	先部山（名護屋）	
奥の院 65	高祖弘法大師	名城山（名護屋）	
奥の院 47	熊野十二社権現	持香山（野元）	
奥の院 73	弘法大師	方見山（石室）	
奥の院 71	千手観世音	引地山（石室）	
奥の院外	弘法大師	海岸寺非松山（石室）	
奥の院 86	文殊菩薩	白豊山（白畑）	有浦下字上場 2
奥の院 88	薬師如来	高白山（白畑）	有浦下字上場 2
奥の院 38	阿彌陀如来	高城山（下村）	有浦下字中田
	奥の院の距離七里九丁		

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第3号

発行年月日 2008年3月31日
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8
TEL 083-788-1841・1842

印刷 アリフク印刷株式会社
〒759-5101 山口県下関市豊北町栗野 4896-8
TEL 083-785-0311
FAX 083-785-0312
